The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語とタイ語のアスペクト形式に関する研究
Author(s)	Rattanaseriwong, Sangtiean
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50571
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（ラッタナセリーウォン　センティアン）	
論文題名	日本語とタイ語のアスペクト形式に関する研究

論文内容の要旨

本研究の目的は日本語とタイ語の基本アスペクト形式である「ル・タ・テイル」と「cà・lɛ́ɛw・kamlaŋ・yùu」を取り上げ、各形式の用法及び意味を考察し、そして話者の視点を明らかにすることである。今までの日本語とタイ語のアスペクト対照研究では、日本語の体系に沿ってタイ語を分析する傾向があった。しかし、日本語の「ル・タ・テイル」はテンス性とアスペクト性が融合されている形式であるため、テンス性が含まれていないタイ語の「cà・lɛ́ɛw・kamlaŋ・yùu」と直接対応させて比較するには無理があり、中立的な基準を利用して分析すべきだと考えられる。

「ル」は話者の述語に対する解釈によって、一般的に現在しか表せない形容詞と共起して「未来」のことを表すこともできると言われている。本研究では、「話者の解釈」について注目し、「ル」の本質と使用条件を再考察した結果、「ル」は話者が出来事を「発話時以降」の出来事として把握したことを示すものであると考える。さらに、「ル」は、話者が出来事を「実現想定区間」の内部に登録する場合、「現在」の意味となり、外部に登録する場合には、「未来」の意味となる。一方、「cà」の機能について、本研究は、「cà」が過去の出来事とも共起することから、「cà」の本質は状態の変化時点前の段階という「基準的段階」のアスペクト性を表す形式であるとし、モダリティ性は派生的な意味であると考える。こうすると、「cà」の本質は「実現想定区間」の外部の出来事を指す「ル」と意味が重なることになり、両形式が翻訳上で対応することが多いことが傍証される。一方、「cà」は発話時以前に把握された出来事と共起する場合、「ル」とは対応しない。

「タ」の意味については、テンス説、アスペクト説やパーフェクト説など、様々な見方があったが、本研究は、話者が出来事を「発話時以前」の出来事として把握したことを示すものと捉え、「ル」と対立させる。「実現想定区間」の内部に出来事が登録される場合、「タ」は「変化」を表し、外部に登録される場合、「過去」か「回想」及び「発見」以外の「ムード」を表す。しかし、「過去」は発話時にでもその出来事が事実であることを確認できる点が、話者の認知の世界で起こった出来事を示す「回想」や「ムード」と異なる点だと考えられる。一方、本研究では、「lɛ́ɛw」を「状態変化後の段階」、つまり、状態変化時点の後の段階を示すと見なし、「cà」と対立する形式として扱う。なお、開始時点と終了時点はどちらも状態の変化を示す時点であるため、変化時点として捉えられる。そのため、状態変化後の段階を表す「lɛ́ɛw」は、開始時点後の段階か、終了時点後の段階か、どちらかを示すこととなる。「cà」と同様に「lɛ́ɛw」も時間ダイクシスの意味を持っていないため、未来の出来事との使用も許される。「lɛ́ɛw」は、未来の変化を表す場合以外においては、「変化」の「タ」と対応するが、「実現想定期間」の外部に位置する出来事とは対応しない。

また、「テイル（テイタ）」については、アスペクトの部分（「テイ-」）とテンスの部分（「ル」か「タ」）が融合している形式であると捉える。話者は出来事から「間隔」を捉えるだけで「テイル」の使用が可能となるため、「テイル」の使用幅は広く多様である。Imperfectiveの「動作の継続（Progressive）」と「（一時的）結果の継続（Resultative）」、さらにPerfectの用法まで見られる。Imperfectiveは一時的な出来事を示すため、「反復」などの用法はImperfectiveから派生していると見られる。そして、Perfectは属性的な出来事であると考えられるため、「経験」や「記録」などの用法は「Perfect」から派生していることになる。一方、タイ語の「kamlaŋ」と「yùu」も、話者が出来事から「間隔」を捉えるが、「kamlaŋ」の場合、出来事の開始時点にも着目し、また、「yùu」の場合、出来事の終了時点にも着目する。さらに、両形式とも一時性（Temporal）を持っているため、Perfectの用法を持たないと予測できる。

分析のまとめとして、日本語母語話者のアスペクト形式の捉え方は、いつも自らが出来事の当事者であり、目の前の出来事のように当該の事態を把握する「主観的把握」の捉え方を反映していると結論づけることができる。一方、タイ語は時間ダイクシスを表す形式を持たないことと、「cà」と「lɛ́ɛw」など対立したアスペクト形式を複合的

に使用することができることから、タイ語話者はいつも出来事を外から観察するように、出来事の順序を傍観者のように把握する「客観的把握」の捉え方を反映しているとみなすことができる。最後に、以上で述べた本研究の成果を第二言語教育に生かすための提言も行う。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　RATTANASERIWONG　SANGTIEAN　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　准教授	山川　太
	副 査　教授	宮本　マラシー
	副 査　准教授	今井　忍
	副 査　教授	岸田　泰浩
	副 査　名誉教授	角道　正佳

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、日本語とタイ語における基本アスペクト形式である「ル・タ・テイル」と「cà・lɛ́ɛw・kamlaŋ・yùu」を取り上げ、各形式の用法及び意味を詳細に考察・分析することによって、日本語、タイ語それぞれの話者が事態をどのように認知しているのかを明らかにすることにある。

テンスやアスペクトといった文法概念に関しては、日本語がその双方を有するのに対し、タイ語にはテンスが存在せず、アスペクトが表現上、大きな役割を果たしているために、タイ語母語話者にとって日本語のテンス・アスペクトは習得が非常に難しい文法項目の一つだと言われてきた。このような場合、当然、学習者の母語と日本語の異同を明らかにした、しかるべき対照研究の成果を援用した指導が望まれるはずであるが、実際には、日タイ両語におけるアスペクトについての対照研究は、まだ質・量共に十分なものではない。両言語のアスペクト表現を扱った研究としては、ラッチャニー(1981)や田中(2003,2004)、Methapisit 他(2000)が代表的なものとして挙げられるが、いずれも日本語のアスペクト形式の諸特徴（日本語のアスペクト体系）を基準とし、タイ語を分析するというスタンスを採っている。しかしながら、上述のように、テンス性・アスペクト性双方を併せ持つ日本語（「ル・タ・テイル」）と、テンス性を有さないタイ語（「cà・lɛ́ɛw・kamlaŋ・yùu」）を対等に、つまり直接対応させて比較・対照するにはそもそも無理があり、かかる作業は単に翻訳パターンのリストアップという側面しか持ち得ないとさえ言えよう。本論文では、認知言語学的視点（話者が事態をどのように認識・把握するか）を考察の枠組みとし、日タイ両語におけるアスペクト形式の比較・対照を行うと共に、先行研究でも日本語に比して分析が不十分であったタイ語の語彙的アスペクトの探求にも重点が置かれる。

まず、第1章では、本博士論文の目的や全体の構成などが述べられると共に、アスペクトに関する日タイ語対照研究の主な先行研究の概観および問題点の指摘も行われている。

第2章では、論文中で用いられる理論的枠組みの説明や用語の定義が行われる。具体的には、Smith(1991)等で扱われている「状況アスペクト(Situation Aspect)」と「視点アスペクト(Viewpoint Aspect)」という概念を導入し、それぞれ、「出来事の有様を示すもの」「話者がその出来事をどのように見ているかを表すもの」と定義し、古典的な「語彙的アスペクト」「文法的アスペクト」のような固定的ではない、柔軟性を持った概念であるとした。さらに、テンスは「時間ダイクシス(Time Deixis)」を表す形式であるとされ、日タイ両語の母語話者が、自らの頭の中でどのように事態を把握しているのか、換言すれば、出来事の有様の描き方の傾向を考察する。

第3章から5章は、第2章で導入された概念を用いての分析が提示されている。

第3章は、「ル」と「cà」のアスペクト性についての考察に充てられている。仁田(2010)は、「ル」は、述語に対する話者の解釈によって、一般的には「現在」しか表せない形容詞と共起して「未来」を表すことができると述べるものの、「ル」を伴って「未来」を表すようになる状態というのは比較的変わりやすい状態であるという指摘のみに留まっており、その「話者の解釈」

の本質、「変わりやすさとは何か」等といった問題については明確にされていない。本論文では、この点を補完するために、話者の視点に注目し、「ル」の本質を探る。具体的には、「予期」という概念を用いて、話者が予期を認識しているかどうかによって「ル」の多義性が説明されると説くが、これは、「ル」同様に、タイ語の「cà」が持つ多義性（アスペクト的意味とモダリティ的意味）をも説明し得るものであり、「ル」も「cà」も共通して複数用法（複数の意味）を持つものの、本質は一つであるという、共通した帰結を得ることになる。

第 4 章では、アスペクトを表す「タ」と「lɛ́ɛw」の意味について考察する。「タ」の本質についての分析が提示され、話者がどのように述語を解釈するかによってアスペクト性を持つ用法が生じるとの説明がなされる。一方、タイ語の「lɛ́ɛw」は「状態変化後の段階」を示すと見なされ、「cà」と対立する形式として扱われる。

第 5 章は、「テイル」と「kamlaŋ・yùu」について論じられ、「テイル」形式が局面を問わず、話者が単なる「継続」のみを認識しているのに対して、タイ語の「kamlaŋ」と「yùu」は「開始時点と終了時点との間における継続」を表すものとされる。また、この両形式が持つ意味の差異に関しては、「kamlaŋ」は「ちょうど」といった意味も含むために開始時点に視点が置かれるのに対し、「yùu」は、以下の例が示すように、「kamlaŋ」とは共起し得ない「2 分間」等の明確な終了時点を持つ期間を表す副詞を伴えるため、終了時点に視点が置かれていると捉えることによって説明される。

a. khǎo yɯɯn yùu sɔ̌ɔŋ naa-thii.
　彼　立つ　yùu　2　分間
　＝彼は２分間立っていた。

b. ＊khǎo kamlaŋ yɯɯn sɔ̌ɔŋ naa-thii.
　彼　kamlaŋ　立つ　2　分間
　＝彼は２分間立っていた。

また、「テイル」は開始時間と終了時間を問題としないゆえに、「kamlaŋ」や「yùu」とは共起できない到達動詞とも共起可能であるとの説明がなされる。

第 6 章では、3 章から 5 章までの分析結果を両言語のアスペクト体系としてまとめ、その体系がどのように日本語とタイ語それぞれの話者の事態把握の仕方を反映しているのかについて考察する。結果、日本語話者の事態把握の仕方は「主観的把握」であり、タイ語の方は「客観的把握」であると結ばれる。最後に、本論文での成果をタイ語母語話者への日本語教育に生かすための提言もなされる。

本研究の価値は、まず、個別言語としてのタイ語研究への貢献が挙げられるであろう。上に記したように、「cà・lɛ́ɛw・kamlaŋ・yùu」といった複数のアスペクト形式について興味深い言語事実を多数指摘し、それらの意味を詳細に記述することにより、アスペクト体系をシステマティックにまとめている点は、後続するタイ語記述研究に大きな影響を与えると思量される。また、日本語とタイ語の対照言語学研究としての重要性にも特筆すべきものがある。先行研究における不備を補っていることはもちろん、一方の言語の体系に沿ってもう片方の言語を分析するといった従来の多くの対照研究のアプローチ自体に疑義を呈し、その上で中立的な共通枠組みでもって双方の言語を比較・対照した点は革新的であると言える。さらに、本論文最終章でも言及されている第二言語教育への貢献も忘れてはならない、本論文が有する大切な魅力である。タイ語母語話者への日本語教育だけでなく、日本語母語話者へのタイ語教育においても、本研究の成果が資するところは大であり、実用的な研究成果となっている。

以上、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与するに十分なものであると判断し、審査委員会全員の一致により合格という結論に至った。